里見義著

和文軌範

巻三

公第壱號

○餞ハゆく人を送る時酒を飲むことなれど餞人以物不若餞人以文といふこともありて文章を以て送るなり
○おとゞハ秀吉なり
○聖の君ハ秀頼なり
○ちくさどハ新古今「そのりゝや

和文軌範巻之三

里見義 著

○春日の御局の餞別 扶桑拾葉巻廿九

豐臣 勝俊

此度吾妻の御使として登り給へる春日の御局ハ。昔黄金の龍を懐ふすとある夜夢に見給ひし後。いくばくもあらずかのおほきおとゞ（大政大臣）に参り給ひて。惟今天の下まつりごち（政事）給へる。ひじりの（聖）君をむつき（襁褓）の中より抱きとり奉り。生し立仕ふまつらき。ちくさどにてそのちゝの丹後守又器

○ふるやに生るは もさゞのありと ハこゝえてあハぬ 君ぞなしといふ うたよりて母の その腹の丹後守 とつけけり

○きやうちくハ和訓栞などにハ景迹とも書きど警策なるべし

○俗言人を饗應するを馳走といふこの文章などの意なるべし

○鳳をさき麟をさくハ珍味珍肴のことへなり

りのさゝやかなれバ。やさしき（優）増荒男まで出雲やくもの道にさへ深く思ひいれぬ。上下打あひいと止事なかりける。父の故佐渡ありしかばと思ひ出らる。掛る子（局）もちて（持）心きやうちく深く。女のさえにてあまりて。萬のうへを哀まゝ恵まれしかバ。世こぞ（挙）りて誰か疎かに思ひ聞えん。道すがら設けする國の守。馳走どもを足を空にまどはし。山より（猟）野に求め川にすなど（漁）り海につり（釣）。尚あまりて鳳をさき麟を屠りて一度あへ（饗）さん事を願ふ。泊々の館にも老かず

○三笠山ハ大和國添上郡にあり

○淡海公四子分爲四流南家北家式家京家なり北

まゐりたる尼法師多く集ふ。呼ひ入れ言よくて物多くたまふ（賜）。うづたかまりて悦ぶこと限りなし。都に入り給ひぬれバ。御門より始め院國母宮々所々の御訪ひ。大路もさりあへねバ。高きも賤しきも佛神の現れ給へるとぬかづき尊み罵る。いかさま深き故あらん。皇孫（スヘミマ）天降りて葦原の中つ國を治め給ひし時。天兒屋根命諸共に引率（ヒキヰ）ておはして後見助け給ふ。今三笠山に跡をたれます春日大明神の御恵なりし。さればぞ此御局御裳濯川の御流にごりなく北の藤浪榮えん事を謀り給ふに。

の藤浪ハ則北家なり

○和光同塵ハ老子に在り

○すくせハ宿世と書て前世の果報をいふ先の世ハ未來なり

春日と呼ひ來ませるもいぶかし。誠に光を和らげ塵に交はる理にやはあれバ内ハ参り給へる様粧ほしくて光みちて。いへば更なり。龍の御顔に近づき心よくうちゑませおはします御景色を見給へる。すくせ。先の世ゆかしきまで。細やかなる御物語聞えあげて。二日三日ありてまかで（罷出）給へ『是』私に休らひ候らはるゝ程。此方彼方事しげく何くれとうつりゆきて。長月も廿日あまりになりぬ。只あさて（明後日）ばかり下り給はんとすれバ。こゝらの人々兼ねて清らに設けおきたりし送り物をなむけかずしらずたちかさねたる綾錦の縫目。いとあざやかに村濃などさまぐに染盡したる色あひぞ。立田姫も及ぶまじく。棚機の手を恥ぢしげなり。焚きしめたる黒方のなつかしげに。あるかを（か落字か）りみちて吹よる風さへ心づかふやと見ゆ。珍らしき調度興ある見物を。劣らじ負けじ。我をかしからんと挑みかはしけるうちに。己いかゞはせん。舊き物を見れバかゝりける折ハ必しうたをよむことゝなりぬ。古へを學ぶなどしつれし例の腰折ハとかくもあらバあれ

○物を染めなす秋の神立田姫も天上の棚機つめも是にハ恥べきとなり

○例の腰折うたハとかくも早

く作らんとなり

ぞていとあまるべし（哥ハ略す）

○己をわすれバ　著聞集巻十九

橘　成季

楚襄王晉國を打んとす』孫叔敖之を諫め申して曰く園の楡（ニレ）の木の上に蟬の露を飲まんとするあり。後に蟷螂のねらはんとするをしらず。蟷螂また蟬をのみ守りて後ハ黄雀のおかさんとするをしらず。黄雀また蟷螂をのみ守りて楡の木の下に弓を引きて童子のおかさんとするをしらず。童子また黄雀をのみ守りて前に深谷後に掘株のあることをしらずして身を過てり』此みな前利をおもひて後害を省みぬゆゑなりと申せり。王此時さとりを開きて晉を責んといふことを思ひ止まりぬとなり

○雪圓（マロ）ばし　源氏朝貌の巻

紫　式部

雪のいたう降り積りたる上に今もちりつゝ松と竹とのけぢめ（注）をかしうみゆ』夕暮に人（源氏君）の御形も光り勝りてみゆ。時々に（源氏詞）つけても人の心を移すめる花紅葉の盛よりも冬のよのすめる月に

○すさまじき物といふ条の日記に志はす比晦日頃月いとあかゝりたる物語しけるを人みてあれすさまじ云々といへりけるをバと河海抄にあり

○あこめハ童子の衣なり上にかざみをき下にあこめをきるがあこめばかりになりたるなり

○中宮ハ皇后の居處なり

雪の光りあひたる空こそ怪しう色なきものゝ身にしみて此のよの外のことまで思ひ流され。面白さも哀さも残らぬ折なれ。すさまじき例にいひおきけん人の心浅さよとて御簾捲上げさせ給ふ月は隈なくさし出て一ッ色に見え渡されたるにしをれたる前栽のかげ。心苦しう遣り水もいと痛う咽びて。池の氷もえもいはずすごきに。童部（ワラハベ）おろして雪まろばしせさせ給ふ。をかしげなる姿。かしら（頭）つきどもを月にはえ（榮）て。大きやかに馴れたるが樣々のあこめ亂れき（著）。帯しどけなき殿居すがたなまめいたるに。こよなう（格別）あまれる髪の末。白き庭にはましてもてはやしたるいとけざやかなり。小さきはわらはげ（氣）て悦ひ走るに。扇なども落して。打解け顔をかしげなり。いとおほう圓ばさんとふくつけ（カを入し負カ）がれど。えも押し動かさで侘ぶめり。片へは東のつまなどにいでゐて心もとなげに笑ふ。一年（ヒトトセ）中宮の御前に山造られたりし。世に舊りたることなれど。尚珍らしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。

○清見の記　扶桑拾葉集巻廿五

○清見ハ駿河國廬原郡にありて海邊を清見潟といひ寺を清見寺といふ

○八湘ハ支奈ニ瀟湘八景といふあり

○徐凝ヶ惡詩ハ蘇軾廬山瀑布詩に飛流濺沫知多少不㆑爲㆓徐凝洗㆒㆑惡詩といふあり

藤原實枝

清見の勝景ハ天下の奇絶なり。『馬を走らしむるものハくつばみを委し。楫を鼓するものハ棹を忘る。徒よりゆくものハ十歩に九度目をうつす。誠に八湘を巻て一望の中にをさむるなるらし。『石を亂を避けて京に赴く日。宿をこの梵閣に投じちぐ。扇舟を催ほすに心なし。よつて兩詠一章を綴りて聊卑懐を述ぶ蓋徐凝ヶ惡詩の嘲りに倣ふと爾云ふ

「清見潟あさゆふなぎふくらぬまでば。あくらぢを花も淺き色かな」

「行やらで休らふ人の心よりきよみがせきの名にとゞめなん」

兵馬飛塵滿㆓九衢㆒　百事春過未㆓曾テ斟㆒マ

莫㆑言勝境無㆓常主㆒　万里江山入㆓戰圖㆒

○木蘭地ハ薄墨色ニ少シ黄色ヲ帶タル色ナリ

○黒革威ハ黒キ韋革ニテ威シタルナリ

○宇治川先陣（盛衰記巻三十五）

小島ガ先ヨリ武者二騎蒐（カケ）出タリ。梶原源太ト佐々木四郎トナリ。『景季ガ裝束ニハ木蘭地ノ直垂ニ黒革威ノ鎧ニ三枚冑ノ緒ヲシメ。滋藤ノ弓ノ中ヲ取リ。二十四差タル小中黒ノ矢負ヒ。練鐔ノ

○三枚冑ハ三枚張ナルベシ鉢金ヲ三枚合セタルナリ

○滋藤ハ藤ヲ繁ク巻キタルニテ大將分ノ持者ナリ

○二十四指トハ常ノ矢ヲ二十四指テ尖矢ヲ一ツ添ヘテ廿五トナル是箙ノ常法ナリトゾ

○小中黒ハ鷹羽ノ中ニ少シ黒キ斑ノアル羽ナリ

○煉鐔ハ革ヲ幾度モ煉ヒテ鐔ニ用ヰタルナリ

太刀佩テ鎌倉殿ヨリ給リタル磨墨ト云フ名馬ニ黒塗ノ鞍置テ騎リタリ。高綱ハ褐（カチン）ノ直垂ニ小櫻ヲ黄ニ返シタル鎧ニ鍬形打タル冑ニ笛藤（フエトウ）ノ弓ノ眞中取リ。二十四差タル石打ノ征矢頭高ニ負ヒ。嗔物造（イカモノヅクリ）ノ太刀帯テ是モ鎌倉殿ヨリ給リタル生唼（イケズキ）ニ黄覆輪ノ鞍置テゾ騎タリケル。誰カ先陣ト見ル處ニ源太颯ト打入テ遙ニ先立ケリ。高綱云ヒケルハ。如何源太殿御邊ト高綱ト外人ニナケレバ斯ク申ス。殿ノ馬ノ腹帯ハ以ノ外ニ寬マツテ見ユル物カナ。此川ハ大事ノ渡ナリ。河中ニテ鞍踏返シテ。敵ニ笑ハレ給フナト云ヒケレバ。サモ有ラント思ヒテ馬ヲ留メ。鐙踏張（フンバ）立擧リ弓ノ絃ヲ口ニ噉ヘ。腹帯ヲ解テ引詰々々締メケル間ニ。高綱サット打渡シテ二段バカリ先立タリ。源太タバカラ（謀）レケリト安カラズ思ヒテ。是モ打浸シテ渡シケルガ馬ノ足綱ニ懸テ。思フ樣ニモ渡ラズ高綱ハ究竟ノ逸物ニ乘リタレバ。宇治川早シトイヘドモ淵瀬ヲイハズ。サヽメカシテ金ニ渡シ。向フノ岸近クナツテ。高綱ガ馬綱ニ懸リ足ヲサト歩ミ除ケヽレバ。元ヨリ期スルコト

○源太ノ粧ヒハ重ニ黒色ノ粧ヒナリ

○褐ハ元來織物ノ名ナレド茶色ヲイフ

○小櫻ヲ黄ニ返スト云ハ青地ニ櫻ヲ白ク染テ其上ニ黄色ヲ施シタル者ニテ花ハ黄ニナリ地ハ萠黄ニナリタルナリ

○笛藤ハ藤ヲ笛巻ニセルナリ

○石打ハ鷹ノ尾羽ナリ石打ト云フ名ヲ賞美シテ用ヰルナリ

○喚物造ハ所々ニ銀ノ輪ヲ入レ鞘ニハ鹿ノ革ノ尻鞘ヲ掛ケ如何ニモ勇シク見ユル故ニイカモノ作リト云フナリ

○四郎ノ出立ハ都ベテ黄色ナリ梶原佐々木両人トモ馬ノ毛色ニ随ヒタルモノカ

○高綱ハ生唼ノ名馬ヲ給ハリ先陣仕ラズバ死スベシ死ナズバ必ズ先陣仕ルベシト兼テ申タル詞アル故ニ生キタリヤト問ヒ又心

ナレバ。太刀ヲ抜キ大綱小綱三筋颯ト切リ流シ。向ヒノ岸ヘ打上リ鐙踏張リ弓杖ツキテ。佐々木四郎高綱宇治川ノ先陣渡リタリヤト名乗モ果サヌニ。梶原源太モ流渡リニ上リニケリ』源太佐々木鎌倉ヘ早馬ヲ立テ。何レモ劣ラジ負ケジト馳テ行ク。源太ガ早馬ハ先立タリケルガ。如何ニシタリケン。足柄ノ山中ニテ高綱ガ早馬先立ヌ。三日ト申スニ。馳付テ。高綱宇治川先陣ト申シタリ。同時ニ梶原ガ使又來ッテ。景季先陣ト申シケリ。右兵衛佐（頼朝）殿ハ。安達新三郎清恒ヲ召テ。佐々木

ト詞ト相違ナシト言ヒケルナリ

○此作者詳ならず巻末にも藤原大弐作とあり

○此故事ハ燕女墳記に在り後玉京死したれバ燕も亦悲鳴して墳上に死すと云ゝ

梶原生キタリヤト問給ヘバ共ニ候ト申ス。其後ハ尋給フ事ナシ。後日ノ注進ニ宇治川ノ先陣ハ。高綱ト注セラレケルヲ見給ヒテコソ。詞ト心ト相違ナシトハ宣ヒケレ

○姚玉京　女郎花物語

姚玉京といひし女。十六歳まで男失せにければ。父母哀みて。又こと男にあはせんといひけれど。いかで貞女の道を失なはんとて。親の辭にも隨がはで。惟一人ありわたりけり。其家に年ごろちきふたる燕鳥の。ひとつがひありけるが。雄鳥う

さて燕鳥只ひとり。こゝをとりにもつがはでひとりありきけり。『姚玉京其めどりにいふやう。汝を心あらば古の雄鳥に添ふことなかれ。自からが食をくひてみづからも同じうこゝろまではをもかし。さいひふくめつゝ。綵をもちて其足につけて。はなちやりて牕にうひならしけり。』かくて其秋は燕鳥はつまいにて又の年此春。外雄鳥にもたぐはずして。ひとり姚玉京が許に來りけるぞ。いとあはれとおもひて。姚玉京詩作りて曰。

昔時無偶去　今年還獨歸

○大學云子曰於止知其所止可以人而不如鳥乎

古人恩既重　不忍更雙飛

そのかみ偶なくして去り。今年はかへりて獨りかへることは。去年の秋つがひなくいにし燕子の今年もひとりはかへり來りたるよ。といへるこゝろなり。古人恩すでに重し。さらに雙飛するにしのびずとは。彼の身まかりける男の恩愛ふかく重くおもひしかば。あらためてこと男と連合ことは甚堪へがたしといふこゝろを。今此つばめに擬へて雙びとぶにしのびずといへり。誠に貞女の志には燕も感じ侍るなれ。まして人なるをかゝる鳥に

○心づきなきハ吾心に協ハぬをいふ

しらざるべくんや

無用の永居（徒然艸 下三十四段）

兼好法師

さしたることなくて人のがり（許）ゆくハよからぬ事なり。用ありて行たりとも其事果なばとく歸るべし。久しくゐたるいとむつかし。人とむかひたれバ詞多く身もくたびれ心も静ならず。萬の事障りて時を移す。互のため益なし。いとはしげにいはんも惡し。心つかぬことあらんをりハ。中々そのよしをもいひてん。同じ心に向ハまほしくおもはん人のつれ〲にて。今暫し今日ハ心静になどいはんハ此限にあらざるべし。阮籍が青眼誰もあるべきことなり。其事となき人の來りて長閑に物語してかへりぬるいとよし。又ふみ（状）も久しく聞えさせねバなどばかりいひおこせたるいとうれし

○心静になど云々ハ心静に遊バんなどいふ詞を省きたるなり

○青眼ハ晋阮籍が故事にて意に適するをバ青眼をなし意に適ざればバ白眼をなすなり

○九月十三夜宴技直宅歌序（加茂翁家集）

加茂 眞淵

秋の夜の長月十まり三日の月をめづることハ。いとはやく唐國にもあらで。空みつ大和國振りに

○亭子の帝ハ宇多天皇なり

なんありける。『其初をとふに。昔亭子帝の今宵此影のこよなきをしミて。中秋につぎけんものとてそなはし給ひ定め宣ハさせけることを。中ノ御門の右大臣保延の初の今日の文にぞ記し置給へりけり。『しかあれバそれより此かた詁刺大宮より天ざかるひなの此極まで高き賤しきめであへることになんなりにける。それが中にあやにくの浮雲をうらみ。ちぐめる浪風を侘る折しもあるを。今年延享初の年。いとゞ御世の秋風静にしてこの二夜の月にも稲葉の雲のよしある悦び

○實の鏡桂の花何れも月の異名なり
○月中に桂樹ありといふ事ハ酉陽雑俎に出づ
○万葉六橘ハ實さへ花さへ其葉さへ枝に霜おけどいやとこはの木といふうたを踏へていへる詞

のゝありて。實は鏡の隈なす塵をはらふ葉なきに分て今宵しもいよゝ桂の花乃光り勝りてなん覚えける。『爰に橘の主。今宵あるじせられバ思ふどち来り集ひて。盃ふびく巡らし言の葉數々唱ふめりける此主のうゝの子。今年十といふ齢にしてみそぢあまりの言のはをぞつらぬなる。こよひしもいと疾く讀出られけり。これハ呉竹の世に珍らかなる事なれバ。唐大和の言の葉にかけて。且ハ宿の橘は花さへ實さへある種をおかれび。且ハ霜雪にもいや常磐ならん生先

なり

○戸ざゝぬ御世ハ史記云子産爲相三年門不閉道不拾遺云々

○めでさせ給へる云々ハ亭子の帝の始て十三夜を賞美し給ひし時をいふ

きを祝ひふめざらるなし』又うつるはやけさを人々の百夜の秋の行末にな幾そ度かあらん。已が世はみそ（三十）よそ（四十）は越方にもいまださみざりけり。ならんいひあひつゝ戸ざゝぬ今は御世にあひて心さへ隔なき纏力を悦び。あるはめでさせたまへる古き御時の始めをしも仰ぎまつるなるなり』惟この折にありて秋はよの永きにあ（肖）へぬ言はなの心乃ゑじかきをなんなぢぬる。其詞にいはく

「めでそめし其長月はこよひなりや。たゞよひなるの

まの光りなりけん」。

○勸學文 駿臺雜話巻五

室 直清

諸君の如きハ春秋にとみ。材力に足る。もし懈らずして日に學に進まバ。何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歳月も恃むに足らバ。材力ハ多とするにたらバ。只孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。若し悠々として日を渉り一旦年老ぬ齡傾きて後。日頃の懈を思ひ出ていかに悔ゆるとも何の益あるべき。即今翁が身の上にて候

されバ古詩にも少壯不努力、老大徒傷悲すとい
ひ、陶淵明も盛年不重來一日難再晨及時當勉勵
歳月不待人。といへば古人もこの感懷を同じう
しとぞ見えし。是等の詩句時々吟詠して勇進の
志を振起すべし。又世に傳ふる朱文公勸學の文
に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來
年。日月逝矣歳不我延。嗚呼老矣是誰之愆。

此文本集に見えず。朱子家訓不自棄の文などの
類にて、朱子の小作か、又ハ後人の擬作にして名

○頼朝此時官兵衛佐ナリ

○天河ハ木ノ虚ナル所ヲ云フ和名抄ニハ半天河ヲウツホノミヅト讀メリ天河ト云フベキカ

を朱子に託せるにてぞあらんなり。誰の作に
もせよ、言簡にして意も明白なり。折節打誦して
自警むるによろしかるべし

○頼朝伏木ニ匿ル　盛衰記巻十七

兵衛佐殿ニ相従フテ山ニ籠リケル者ハ、土肥次
郎實平、同男遠平、新開次郎忠民、土屋三郎宗遠、岡
崎四郎義實、藤九郎盛長ナリ、兵衛佐ハ軍兵チリ
ぐニ成リテ、伏木ノ天河ニ隱レ入リニケリ、其日
ノ裝束ニハ、赤地ノ錦ノ直垂ニ、赤威ノ鎧著テ伏
木ノ端近ク居給ヘリ、スソ金物ニハ銀ノ蝶ノ丸ヲ

○伊豫守ハ頼義ナリ

○鶴岡八幡宮ハ源頼義安倍貞任ヲ誅シタル後勧招セル所ニシテ祖先ノ祭レル弓矢ノ神ナル故ニ

キビシク打チタリケレバ。殊ニ輝キテゾ見エタル。其中ニ藤九郎盛長申シケルハ。盛長承傳ヘ侍リ。昔後朱雀院、御宇天喜年中ニ。御先祖伊豫守殿貞任宗任ヲ責ラレケルニ。官兵多ク討レテ落給ヒケルニ。僅ニ七騎ニテ山ニ籠リ給ヒケリ。王事毋盬終ニ逆賊ヲ亡シテ四海ヲ靡カシ給ヒケリ。今日ノ御有様昔ニ相違ナシ吉例ナリト申シケレバ。兵衛佐頼モシク覺エテ八幡大菩薩ヲゾ心中ニハ念ジ給ヒケリ』田代、冠者ハ矢種既ニ盡キヌ。佐殿今ハ遥ニ落延ビ給ヒヌラント思ヒケレ

頼朝ノ念ジタルナリ

○田代冠者追兵ヲ防ガンガ爲ニ木ニ登リテ弓ヲ射タルコト前ニアリ

バ。木ヨリ飛ビ下リテ。跡目ニ付キテ落給ヒ同ジク伏木ノ天河ニゾ入リニケル。田代。佐殿ニ頬ヲ合セテ如何ニスベキト歎ク所ニ。大庭。曽我。俣野。梶原。三千騎山踏シテ木ノモト萱ノ中ニ亂レ散リテ尋ネケレドモ見エザリケリ』大庭伏木ノ上ニ登テ弓杖ツキ踏マタガリテ。正シク佐殿ハ爰マデオハシツル者ヲ伏木不審ナリ。空ニ入リテ捜セ者共ト下知シケルニ。大庭ガ從弟ニ平三景時進出テ。弓脇ニ挿ミ太刀ニ手カケテ伏木ノ中ニツト入ル。佐殿ト景時ト眞向ニ居向キテ。互ヒニ

○冥加ハ梵網經ニ出ヅ冥々裏ニ神佛ノ加護シ給フナリ

眼ヲ見合セタリ。佐殿ハ今ハ限リナリ景時ガ手ニ懸リヌト覺シケレバ。急ギ案メ降ヲヤ乞フ。自害ヲヤスル。ト思シケルガ如何景時程ノ者ニ降ヲバ乞フベキ。自害ト思定メテ腰ノ刀ニ手ヲ掛ケ給フ。景時哀ニ見奉リテ。暫ク相待給ヘ助ケ奉ルベシ。軍ニ勝給ヒタラバ君忘レ給フナ。若シ又敵ノ手ニ懸リ給ヒタラバ。草ノ蔭マデモ景時ガ弓矢ノ冥加ト守リ給ヘト申シモ果テネバ。蜘蛛ノ絲。颯ト天河ニ引タリ。景時不思議ニ思ヒケレバ彼ノ蜘蛛ノ絲ヲ弓ノ弭。冑ノ鉢ニ引懸ケテ暇

○眞鶴ハ相模國足柄下郡ノ東南ニ斗出セル所ヲ眞鶴カ崎ト云フ

○すさまじきハ時すぎて荒涼なる

申シテ伏木ノ口へ出ニケリ。佐殿然ルベキ事ト思シナガラ掌ヲ合セ景時ガ後貌ヲ三度拜シテ。我世ニアラバ其恩ヲ忘レジ。縱ヒ亡ビタリトモ七代マデハ守ラントゾ。心中ニ誓ハレケル。平三伏木ノ口ニ立塞リテ。弓杖ヲ突テ申シケルハ。此内ニハ螘螻蛄モナシ。蝙蝠ハ多ク躁ギ飛ビ侍リ。土肥ノ眞鶴ヲ見遣レバ。武者七八騎見エタリ。一定佐殿ニコソト覺ユ。アレヲ追ヘドゾ下知シケル

○すさまじきもの　枕草子

るゆゑなり
○網代ハ冬の程氷魚をとるものなり
○除目とハ官に任するをいふ春行ハるゝを縣召（あかため）の除目といひ秋

清少納言

ひる吠ゆる犬。春の網代（中畧）乳兒のなくなりたるうぶや（産屋）。火おこさぬ火おけすびつ（桶炭櫃）。牛惡みしぬる牛かひ。はかせのうちつゞきて女子うませたる。（中畧）又必來へき人の許に車をやりて待つに。入りくる音すれば さななり（然也）と人々出てみるに。車宿にいれて轅（ながえ）ぶうとうちおろすを。いかなるぞや問へば。今日はおはしまさず渡り給はず。さて牛の限り引出ていぬる（中畧）ぢもく（除目）に司得ぬ人の家。今年ハかならずときゝて。早うありしものどものほかほかなりける。片田舎にすむものどもを皆集りきて。出入る車は轅もひまなくみえ物まうでする供ふを。われもわれもと仕ふまつり。ものくひ酒のみのゝしりあへるに。果る曉まで門敲く音もせず。あやしなど耳立てきけば。先追ふ聲々して上達部（カンダチメ）など皆出給ふ。物聞に宵より寒がりわなゝきをりつるげすおの子など。いと物うげに歩みくるを。居るものどもは問ひだにもえとはず。外より來たるものどもなどぞ。殿ハ何にかならせ給へるなどとふ。いらへにハ何

行ハるゝを司召（つかさめし）の除目といふ
○果る曉とハ除目三日つゞきて行ハるゝ其果の日の曉なり
○門敲くハ任國の御用召をまちうするこゝろなり
○先追ふ聲ハ除目の曉公卿の出仕ニ警蹕して非常を戒しむることなり
○物聞ハやうすきゝに下司を所

々につゝいちくなり

○何の前司とハ本國司たりし人の任果て後他の國に仕ざらせぬをいふ

○來年の國々とハ四ケ年にて任果をバ又々來年明くべき國を數へて下部どりの待さまなり

○遊仙枕ハ開元遺事に在り枕之

の前司にこそあと必いひなる。誠に頼これを
のみ甚しう歎かしこれけり。たゞむかしにな
れて隙なく居れつる者も。やうやく一人二人づゝ、（朝）
もくれいでぬ。古きりの、たゝえ行離るまじきも
ハ。來年の國々を。手を折れて數へなどして。ゆる
ぎありきつるをいみじういとをしうきさまし
けるなり。

正意法橋餞別　扶桑拾葉集巻廿八

豊臣　勝俊

ある書つゝる和らくのに遊仙の枕を引よせたく。

蘇則十洲三島盡在夢中云々

○まどろむといふハまど眠るにあらで又現にもなき間を云

○胡蝶ハ莊子の故事前に出づ

○葛城神ハはしを造れる故事なり

○實さへ花さへのうゝさハ前にいづ

○古今五月まつ

まくらしまどろみいるほどにや、胡蝶の飛かふ
翅も花の香もめる春の風のゆるく吹きたるこ
ろしもいと荒らかなる門をたゝく音すめり。葛城
の神が造れるにハあらねど。これを夢の浮橋な
らましを果てば。ふとおどろかれねびきて。目な
いすりのびおを伸して今ぞおしまづきに寄居
たく名残をおかりふ童此來りてものしさつぐ。（彼）
ちと打ゑつるに正意法橋なりけり。紀伊の國（方）
よりよべなん登りぬ。この此國のつとゝて實さへ（苞）
花さへといへる橘をおくりきつるぞ。昔の人

花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

○拾遺「みくまのゝうらのはまゆふ百重なる心は思へどたゞにあはぬかも」

○古今「むらさきの一本ゆゑにむさしのゝ草はみながらあはれとぞみる」

○桃の林ハ豎道をいふなるべし本草に玉桃服之長生不死といへり桃の長生なることも尚數々あり

○李白杜子美の

の袖の香をなつかしく。御熊野の浦のはまゆふ百重なしを限らぬ志を。うへ〴〵語らふ』やんごとなくて此十餘日ばかり。吾妻の遠き境となる武藏野の冬の景色を見がてら。一本ゆゑにといひし紫の根ざしも。なほ哀とおもひ立ぬべきを。罷申しの爲になんときこゆ』ちにやとばかりいひやるかたなし。何がしる桃の林のうちにゐづさひ。藥の園生に遊ぶこと久し。大凡く（孔子）れいをび（優）かなる書のこゝろに習ひ。かくまでゐる李杜の跡をまなび。龍を屠る刀の新なる伐なりても

詩をまなびしなり

○屠龍ハ左慈が曹操に龍を食ハしめて病を療せしこと

○華氏が骨ハ華陀が關羽の臂骨を刮りて金瘡を愈さしこと

○孟子告子下云山徑之蹊間介然用之而成路爲間不用則茅塞之焉今茅塞子之心矣

○古今こゝは「おもてふそおもはん中ハなるまとめそをぶに後のそすそがるとに

先華氏の骨をはきかんご刀をかれを磨かずしもあらば。馴き親しく交りむつびて。なすこと既に年ありけり。逢ひうるだよふ心の水の淺なのれるをもはらみあへぞ。二人のえちしむかひ。心地よかれるゝ（事）てもおもかえば日をくらしうぞ

ゐまの夜の闇なるをなしで。いざよふ月をまちいづる。さるを又名殘多かるあて（貴）人にて。斧をめぐらばよすがなかけぶを俄に立別きなぞご息づかしく胸つぶるゝて。心のまゝの庭乃蓬も人の跡をさへや繁り果んと侘しげよしさらしぞ歸りけん

程をふりさかこちやる筆はすさびに始めより
の事どもをそのつばらかにしるしはべらんこと難しか
らん。折々はさらにそこを見よかし。忍ばしくしうしん
時々は汝の物がたりにかへにても見んとなるべし」
「ともすればさらぬ別るゝをもみらるゝめぐりのむ
のうきことありやなしやを」
「東路はいざこまなべてこねのふまでやつれ
かへるも君にぞ有りし」

離筵頻拭涙　君去會明年
旅館聽疎雨　高樓望淡煙

○えびすは兵隊をいひしなり

○上達部殿上人は前に出づ

洛陽霜樹月　別墅雪梅天
斯景斯時恨　誰能千里傳

○武に誇る可からず　徒然艸上八十段

兼好法師

人毎に我身にうとき事をのみぞ好める。法師は兵のみちをたて、えびすは弓引くすべしらず、佛法しりたるきそく（氣色）し、連歌し、管弦を嗜みあへり。されどおろかなる己が道よりは、猶人におもひあなづられぬべし。法師のみにもあらず、上達部殿上人、うへざままでおしなべて武をこのむ

○孫子曰百戦百勝非善之善者也

○兵は兵器なり

人多かり、百たび戦ひて百度勝ことをいまだ武勇の名を定めがたし。其故は運に乗じて仇を砕く時勇者にあらずといふ人なし。兵つき矢きはまり終に敵に降らば死を易くしてのち始めて名を顕はすべき道なり。生ならんはやがて武にあらざるべからば、人倫に遠く禽獣に近き振舞其家にあらずば益なきことなり

○述懐といふを題にて　鈴屋集七の巻

本居　宣長

昨日は今日此昔にて、ものおくのことゞもなほすぎ

○世籠るは齢をこめて春秋に富めるなり

ゆく世の中をつくづく（熟）と思へば、哀我世も幾程ぞや。手を折りて数ふれば、はやいそぢにをあまりなり。命永くて七十（ナヽソヂ）八十（ヤソヂ）生けらんまで、げに早く央ぞすぎぬるよはひおもへば、まづ世籠るやうなる身も、ゆく先ほどなき心地のして心細くぞおぼゆる。かくはかなく心なき艸木鳥獣のおなじ列に、何（為）すとしもなく、あかしくらしつゝ生ける限の世をつくして、徒らに苔此下に朽はてなんは、いと口惜しくいふかひなかるべきことゝ思ふまゝぞ、萬に至りすくなくはかなき身

○身をえうなき者に云々ハ第二巻伊勢物語の所にハ無用の意なりと注したり然るに此所本書えうの假字なきハ要なきの意なるとしるべし
○かのめに志いづるハ俗に曲りなりにも出来るといふ意なり
○あいな頼ミハ

にしあるぞ。何事を志いでゝかハ世の人にも数まへられき。なからん（亡）後の世にくちせぬ名をぞ世に止めまし。といはゞ人に似ぬわろきさへ取添へて悲しく心うかるに『はかなくてはふ身をえうなき者におもふこともし果つべきにもあらず。かくのみ劣なく。愚なる心ながら。何業にまれ怠りなくまざと心にいれて勤めゆらんにも。竟にハ一ツゆゑづけて。なのめならぬ（斜）志いづるふしかなどのいはねからんとあいな頼ミにうちすぎてなん』（冗）

○臨瀛閣記　代二甘露寺親長卿一作レ之

アテニナラヌ頼ミといふ意なり
○此文章式本より抜萃せり故に書名を出さず
○東山嵯峨野ハ西京の東西にあり

富士谷成章

ひんがし山の春の曙。さが野の秋の夕暮。艶なる心ちしてこまやかなる様こそあれ』近き程は難波わたり。志賀の辛崎など聞ゆれど。都人ハありくさまよふ旅ねをぶふ懶くして。心易くもなさばうし』まいて景色ある山の姿。ゆかしいハある（寛）海の上ながらも。西の國にこそ多かめれときこゆるを。心ある人こそ坐しながら遠きをもしるといふなれ。めぐらしを近くなる夢路に一向に見ぬ方にハ通ふ事なし』あるいはむかし読ミ置ける古事を

○菅の根ハ永きことにいへり
○見てしがハ見たく希ふ意なり
○瀛洲ハ海中の神山なり嚴嶋を臨む故ふ臨瀛と名つけゝり

を見自から人此ゆゑしらんと語りなすを聞き置きて。詠めがちなる春の菅の根。夢路に踈き秋のよごろ。行べなく魂ハかくがき心から。ならぬ山かハ。に見てしがなとおもふ折多かり。画にかゝるハ今少し有様まさりて見るかひある心地ぞする』なりけるに安藝人淺野某の主。住む所におもしろき高どのを造り。臨瀛閣となづく。其邊ミやらるゝ山のあるやう。海の心ぞへ。林のふちど。水の流まで細やかなる繪に作りて。此ありさま記に作るべきよしいひおこせるを見るに。標べぬく

○夫木集「あぶなゝらん人にハ見をじいつく島浪のぬき衣きせんものゝか」
○沖にうきくるといふ故事未だきゞいださず

思ひやらるゝよりも。たゞられぬ目うつりて。かづく其境に遊ぶらん心地ぞする。』閣ハ南に向ひて寛かなる海原のさま。振放け見る便りあらんかし。皆老の山も唐めきたる奇しき名なりけれど形をふしうで立り。中畧 巽にあたりて沖中に嚴島おもしろく疊みなせり。「あぶなゝらん人にハ見せじ」といひけん事さぞ見ゆる。沖にうきくるときゝたる わきが嶋なる島ハ。「誰語りあつしらん」。何の浦くまの隈など多く見ゆれど。しらぬ事をさのミハとてあん。』閣ハ三つのまどを作りあげて。

○古今集大歌所「おふの浦にかたえさしおほひなる梨のなりもならずもねて語らはん」

飛ぶ雁の數さへかづぶして讀づべう見ゆ。庭寛からんと見えて木高き松。花の木。藤。紅葉。などの故ありて立交じり。何めかしう疎かなる垣ねもをたして。和やかなる入江の浪。かゝらん所に世を盡さばやと。徒に心を動かす業こそ。尚貫之の主にはめやかきぬべけれ。『折につけたる詠ハ。げに墨づきの筆限りあるなるべし。今此記に比ひてを委しき様ハ書かまほしくなれり

○連歌（散木寄歌集十の巻）

源　俊頼

○清瀧ハ山城國高雄川の別稱なり

○つくとハ附句の意なり

中納言重資。藏人頭にて侍りける時。殿上の人々あまた具して大堰にまかりて。船に乘りて清瀧といふ所まで登りて遊びけるに。岩ごをけしくて。浪高しとてかへりける。

隆源阿闍梨

清瀧もがんせきさんの所かな。

つく

浪たかのせ船わきかへらすな。

中宮亮仲實。備中の任に下りける時に。備前にあふすきのくゐといふ物の。立ちさゝたる崎に鵜と

○和名抄盥、多良比
手洗の意

いふ鳥と、鷺といふ鳥と居たりけるを、具したり
ける六波羅別當といふ僧の申たりける。

鳥とみつるはうさぎ（兎を添ふ）なりけり

これを亮仲實得つけて、京に詣で來て語りけるを
ぞつけゝる。

木の實こそかき（蠣）さへま（濱）ぐり（栗）ハ聞ゆれど。

鞍馬に參りたりけるに、師の房にて足のきたな
きをすゝがんとて、たらひ（手洗）をもて來りけるを見
て、房主の僧にいひかけける。

たらひして足をバいかですゝぐべき。

僧のえつけざりけれバ、かへりて申ける

水ために湯をわかぬ物かは。

鵜といふ鳥を見て僧のよみたりける。

頼（一本ナシ）筭法師

あらう（洗と荒鵜と）て見れど黒き鳥かな。

人をつけざりければ、後に聞て

さきこそハ墨の江ならめ世と共に。

人々あまた八幡の御神樂に參りたりけるに、事
果て又の日、別當法師（印イ 幸イ）光清（之イ）が堂の池のつり殿に、
人々居なみて遊びけるに、光清（之イ）連歌作る事なん

得らる事と覺ゆる。唯今連歌つけなやなど申居たりけるが。形の如くして申しありける。

俊重

つりどのゝ下にゐ魚やすまざらん。

光清（元イ）頻りに案じけれども得つけで止みにし事なりとぞ。かへりて語りしこそ心こふとて。

うつばり（梁と針と）の影底にみえつゝ。

狂人のまねをするハ狂人（徒然艸上八十五段）

兼好法師

人の心質直（すなほ）ならねバ偽りなきにしもあらじ。さハいへども自から正直の人などかなからん。

○大なる利を得んがためと云々ハ賢人を悪むの詞なり

○知りぬといふハ兼好が悪人の妬心をしるなり

○論語巻之九子曰唯上知與下愚不移

○揚子法言睎驥之馬亦驥之乗也睎顔之人亦顔之徒也

己すなほならねど人の賢を見て羨やむべきハ常なり。至て愚なる人ハ適（たまたま）賢なる人を見てこれを悪む。大なる利を得んが爲に少しきの利を受けず偽（いつはり）飾りて名を立んとすと誹る。己が心に違へるによりて此嘲（あざけり）をなすにて知りぬ。この人ハ下愚の性移るべからず。偽りて小利をも辭すべからず。かりにも賢（愚イ）をまねぶべからず。狂人のまねとて大路を走らバ則狂人なり。悪人の眞似とて人を殺さバ悪人なり。驥をまねぶハ驥のたぐひ。舜を

○仁和ハ光孝天皇（天德ハ村上天皇也）

○五條三品ハ俊成卿なり

まねぶは舜の徒なり。偽りても賢を學ばんを賢といふべし

細川右京太夫自歌合跋　（扶桑拾葉集巻二十四）

藤原　實隆

抑歌合といふ事。仁和天徳の帝。近くハ今の世に至るまで。おほやけ私につきて其數多き中に。獨の歌を左右に分ちつゞへることぞある。圓位ひじり御裳濯川の歌合や始とぞ申べからん。又判者の用ゐ仰がるゝ事ハ呉竹の世々を經て。敷島の道の聖なる中にも。五條三品のミ古今に獨歩して

○枕ごとハ常の詠びものにしてひとつねのわざといふがごとし

○父子ハ俊成定家なり

世にこれを許さるにや。彼（圓位）上人の歌合ハ代々の詠び家々の枕ごとゝなれる事も。多くハ三位禪門父子の判詞に色を添へたるにこそ。大凡倭歌ハわづかなる假名の四十七字を出ずして。萬の事をいひ顯ハすに人の心關れければ。己がじしく思ふに任せて。風體といひ。心詞といひ。好む所まちまちなりといへども。誠の佳境に至ることかたし。いと堅き業になん侍るや。はかなき何をかよしとし何をかあしとも。十目のみる所。一字の褒貶に及び難きものなるをや『爰に一夜の雪のつとめて（早朝）

○古今序文屋の康秀ハ詞工にして其様身に負ハずいはゞ商人のよき衣をきたらんがごとし
○鐙ハ武藏國の名産なり尤冠詞にして指といふにかけたり
○輕きをき云くこハ輕き衣をき肥たる馬に鞭うつなり

扶風源君一巻を送り給ひて。判詞加ふべきよし侍れば。つたなき翁が身に負ハざることなれど。商人のよき衣にもを過ぐるべし。怨ミ返し送り侍らんもはづかしにて。先片端をちらと開き見給るに。錦色々に玉聲々なり。武藏あぶみさしを名高き武將の家を受けて。政を助け民をはぐゝみ。諸々の事業しげきいとま。輕きを著。肥たるに鞭打ちて。世の中に樂しみて榮ふのみ驕り習ひ。さるハ近き年頃となりても。梓弓ひきしぼり茢菰の亂れ繁くて。吾邦の道に携ふべき人ならふ。浅香山の春を忘

○張良が籌を歌の上にも及ぼさるなり
○稲船ハ否といふ冠詞にて古今に「最上川のぼれバ下る稲舟のいなにハあらずこの月ばかり」といふあり

き難波津の冬籠り果てぬるか。いつれいとまに沈吟し思ひ運らしけるらん。帷幄の中千里の籌ハ。六義の上にも及ぼしけるにや。その勝事を決せん事ハなべての力なるべきかをわしげなく。彌〻筆を投げすて侍りしかども。稲船のいなむやをいひそてがたく。此月ばかりに度々に催さし侍きバ。片絲の筋なき節どもを書つけ侍る。元より窓の雪にうとく野邊乃霞にたど〳〵しき心のまどひ。言のはを續くぞ。片腹痛き事に侍れども。まめやかに樵歌童謡になぞらへて。かたへの謗りを

顧ミざるはなん。

松屋文集序（松屋文集巻の一）

城戸千楯

いとよき人の著給ふなる綾の絹は。いとよき絲を撰ミて。最（イト）よきはとり（機織）のいとよく勤めて織るとなんいふなる。此松のや比藤井君の言比葉のあやも中昔乃文をむねと立られて。いとよく其趣を思ひとりて。いとよき詞の限りを取り集め。いとよく作りなはされバ。彼最（イト）善き絲していとよく織なる綾絹のやうにいとよしと世の人のめでそやすもことわりになんありける。已年頃此君の文どもを乞ひ得て木にゑらせんと思ひ居ましに。去年より都に登り居給ひて。いとよき折柄なれバ。此事語らひてせち（切）に乞ひけれバ。年經て書集め置給へる中より。くさ〴〵様ゞものしたるを。いとよく撰び出て見せ給へるを。ミくハるしるになん。うちきけバ。いとよくふミかゝんとおもふ輩ハ。此綾ことぞのいとよきを鏡として。明暮はいとよく勤めまなばゞ。自（オ）らいとよきふりに移ろひて。終ふる此君のこゆぞの

○東川ハ加茂川なり

○拾遺「逢坂のせきの岩かどふみならし山立出るきりはらのこま」

○白樂天詩云三

おやの如く、いとよしと世の人に感でもやされなんかれぞや。

○都のつと

僧　宗久

まだ夜をこめて都をいづ。有明の月は影、東川の浪にうつりて、鳴き殘れる鳥の聲、遠里の跡に聞えて、そこはかとなく霞み渡れる空の氣色いとおもしろし。頓て逢坂山をこゆ。杉の下道いまだくらく、關の岩かど踏みならすもたど〳〵しき程、都のかたはいつしか隔りゆくも、三千里の

五夜中新月色。三千里外故人心。

○菩提ハ名義集に「道之極者稱菩提」云々佛道の極所なるべし

○万葉「世の中を何にたとへん朝びらきこぎいでし船のあとなきがごと」

外の心地して、故郷を別れしよりも尚心ぼそかり侍りしにや、其日も石山に通夜し侍りてぞ、一筋に無上菩提心の願を祈り申き。明ければ下向の人に伴なひて日出る程に、にほの浦をすぎ、行船のあとを遙に見渡されて、彼の滿誓沙彌が何に譬へんと詠しけるふぜいも心にうかび侍り。中畧

駿河國うつの山をこゆ。つたの細道もいまだ若葉の程にて紅葉は秋思ひやられ侍り。

「あきはさぞ夢とやならん。うつの山うつゝは見つる蔦は青葉も」清見が關に泊りて、まだ夜深

○侍りしと止むるハ變格にて侍りし歌なるといふ詞をのこしたるなり

○古今「するがなる田子のうらなみたゝぬ日ハあれども君をこひぬ日ハなし」

○時しらぬ山をふじのねといふうたを本としてよめり

くいで侍るとて思ひつゞけ侍りし。

「清見潟浪のとさしもあけてゆく月をばいかによその關守」立ゝぬ日もありときゝし田子の浦浪すら。旅の衣手はいつとなく塩たれがちなり。富士の山を見渡せば。いと深く霞こめて時しらぬ山とも更に見えず。朝日の影に高ねの雪尚鮮かに見えて。鏡をかけたる樣なり。筆にも及びがたし。

「時しらぬ名をさへこめてかすむなり富士の高嶺の春のあけぼの」

○浮島が原ハ駿河國富士郡にあり

「ふじのねの烟の末ハ絶にしを。ふりける雪や消えざるらん」。それより浮島が原をすぎ。箱根に詣づ。げに權現のあらたなる誓なりしかば。この山の此嶺にかゝる水あるべしとも覺えず。いと不思議なり。中略 所のさまをのべてにかきたる事ども多かりき。いつとなく浪風あらくていと涼しくきこゆ。

「箱根路や湖あらく山風よ。あらやらぬよのうさぞしらるゝ」さて相模國鎌倉。山の内といふ所に行きつきて。古へゆかりありし人を尋ねしに。

○淺香沼ハ即今猪苗代と唱ふるものにて岩代國耶磨郡にあり

昔語になりぬと聞しかバ。早う住なれる處のはまなど見侍りて。いとゞ世のはかなさを思ひしみ侍りき。

「見し人の苔の下なる跡とへバ。空ゆく月も尚うすむなり。」それより出羽の國へこえてあこやの松など見めぐりつゝ。みちのく淺香の沼をすぐ。中畧　山田の里といふかたへゆきぬ。さる海面に何のいろりもなく作れる草の庵なれど。故あるさまにしなしたる庵室ありしかバ。そこに止り侍りしに。長月十日余（アマ）りの事なり後の山よりおろす嵐にたぐひて鹿の音近く聞ゆ。前ハはるかに見渡さるゝ海の上に。更行く月の影浮びて。友呼ぶ千鳥のしばなくこゑもいと心ぼそくてぞ聞え侍りし『あくれば遠き野邊を過るとて其名をとへバ。たまらんはしり井といふ。逢ふ人もなく遙なる道に。山だちなどいひて人を過つたぐひ多かれバ。旅人も早くゆかんことをのみいそぎ走る故に。いひつけたるにや聞侍りしやらん』。ある時は嶺の嵐を片敷野原の露にふし。或る時は磯打浪に夢をさましうきねの床に袖を

○走井の地名よく分らず
○山だちハ山中に栖みて強盗をなりはひとする者の名なり山だちハ田舎ものゝ名まりふべからず

○逢隈川ハ岩城國白川郡にあり

しげる。自ら夢の枕に弱りゆく虫の聲をきゝて秋の末葉にちりゆくこゑをおもひ。海人の笘屋にふし馴れて月の出じほの程を空にしる。加様にいづくともなくあくがれ罷りし程に。白川の關を過ぎて廿日あまりにもなりしに。廣き河の邊にいでぬ。是なん逢隈川なりけり。都にて遠く聞渡りし所の名なれば限りなく遠く來にけるかなとも思ひしらる。中畧道の邊に一ツの塚あり。行來の人のしわざにや覺えてあまた此木に詩歌など數多書つけたり。昔とうへいわう（東平王）といひける唐人の墓なり。故郷をこひつゝ、爰にて身まかりけるが。其思ひの末にや。塚上の艸木も皆西へ傾くと申習ハさりとかゝる人ありしかバ。中畧誰も旅の空にてはかなくなりなば。夜半の烟も尚故郷の方にや靡かましと憂世の妄執もあぢきなく覺え侍りしが。塚の上に松の木あまた生並べるも。うなゐ松とハ是にやと哀なり。物語の例も思ひいでらる。

「故郷ハげにいかなれバ夢となる。後さへ尚もますきげるらん」そこをも尚すぎて。武隈の松の

○夜半の烟ハ火葬のけぶりなり

○源氏物語幻に人の形見をうちなる松におぼえさるとあり死人の塚上の松を形見にする意なりうなゐ松ハ馬鬣松とかなり

○武隈ハ磐手郡にあり
○名取川ハ名取郡にあり
○古今「みさむらひ御笠と申せ宮城野の木の下つゆハあめにまされり」
○侍りしといふも侍りし事よといふ詞を省きたるなり
○拾遺「いにしへハちるをや人の

陰に旅ねして木のまの月に心を盡し、名取川のわたりを過るとてな。行水の歸らぬいにしへを憐ミむ。宮城野の木の下露もまことに笠もとりあへぬ程なり。花のいろ／＼錦をしけると見ゆ。中にも本あらの里といふ所は。色ながらも外よりは殊なる萩のありしを一枝折りて。

「宮城野の萩乃名におふもとあらの。里ハいつよりあきそめにけり」と思ひつゞけ侍りし。此所ハ昔なる人うゑたるを今ハさながら野ら山となりて。草堂一宇より外ハ見えず。かの花をも古へ

をしみけん花こそ今ハむかしこふらし」
○多賀ハ陸前宮城郡にあり
○末の松山も同郡海岸にあり
○古今大歌所のうた「君をおきてあだし心をわがもたバ末の松山なみもこえなん」

なちるをや人のをしみけん。とあぢきなに思ひやられ侍りき。中略さてみちの國。多賀のこふ（國府）にもなりぬ。夫より奥の細道といふかたを南さまに末の松山へ尋ねゆきて。松原ごしにちら／＼と見渡さるぞ。げに波こす様なり。海士の釣舟どもされがら梢を渡るごとく見ゆ。

「夕日さす末の松山霧たちて。秋風かよふ波の上かな」其日暮るゝ程に塩竈の浦にゆきつきぬ。則神體なるやがて塩がまにて渡らせ給ふ。御前に通夜し侍りぬ。此浦の東に向へる入海に掛橋高

○かゝろハ和訓栞ニ艀纜の義なるべしといへり

○壬生二品上ニ「思ひ侘び松ヶ浦島尋ぬる心ある海人や慰むると」

○五大尊ハ不動。降三世。軍荼利。大威徳。金剛夜叉。なり

くかけて、浦よりをち（遠）に通ふところあり。又磯の際を廻りて山の陰をゆく道もあり。海士の家ども多く作り並べたり。烟の立登るを是や塩やくなるらんと見ゆ。浦こぐ船の綱手も處がらにや心ひくすぢなり。更行月にかゝろの音絶々聞えていと心すごし。わが御門六十餘國の中に、塩竈といふ所に似たるなしと古への人はいひけんも理とおぼえし。

「有明の月と共にや塩がまの浦こぐ船も遠ざかるらん」それより浦づたひして松島に尋ね行きけるに心ある海人のすみかと見えたり。又此所に圓福寺とて寺あり。覚満禅師開山の地なり。僧衆百人とかや。寺の前南は塩がまの浦へたゞなて千嶋なりといへども、ちかく其限りみえば、あるはおきの遠島とて海を隔てゝ遥なり。其あひだ（あはひイ）小島多くみえたり。松島の東にあたりて離れたる島に橋を渡して一の堂あり。五大堂といふ。頓て五大尊を安置せり。南へ向へる山蔭の磯際に石を高く疊みて細き道あり。海のきしを傳ひゆきて見れば、洲崎に松生ひ傾きて梢を浪にひたさせ

○三尊ハ彌陀。觀音。勢至。なり

り。行かふ船はさながら志づえ（下枝）の緑をこえゆく。其より少し隔りて小島あり。是なんをじまなるべし。小船に綱をつけてくりかへしつゝ通ふ所なり。此島に寺あり來迎の三尊並に地藏菩薩をすゑ奉まつり。小島より南一町ばかりはなれ出て松竹生ひ並びて苔深く心すごき所あり。此國の人のたくのれくなりにたる遺骨ををさむる地なり。其外發心の人の切するもとゆひなども多く見ゆ。いと哀に心すごく覺えしかば。二三日とゞまり侍りき。

「誰とわかさ別きの數を松島や。をじまの磯乃涙まぞこう」。

○父兄訓自序（甘雨亭叢書）

林　子平

和漢子弟の賢良なるべき事を希ひて。異國ニ孝經論語及び禮記の曲禮弟子職。又ハ朱子の小學等あり。本邦なる大和小學。本朝孝子傳。女家訓。女大學等ありて。弟子を教へ導けども。父兄なるをのに父兄の職分を教ふる書なし『然るゆゑに父兄なる人。面々の子弟を教へ導くすべをしらず

○無頼ハ史記漢高祖傳にありて小兒の多詐狡猾をいふといへり

○作法の字ハ左氏襄公傳容止可觀作事可法云々是より出たり

して弟子を育つる故。弟子なる人多くハ。無頼無作法に育つなり。此故に其子も無頼。其孫も無作法なれバ。續きて曾孫も玄孫も。無頼無作法なり。是故に世に孝悌忠信を志す人少なけれバなり。故に五倫壊亂して見苦しき家族。世の中に多くあるなり『小子之を悲しミ憂ひて。今新に父兄訓を作りて。世の父兄たる人に。子弟に教へかたを示すなり。父兄たる人この書をよミて。子弟を教ふる爲便（スベ）をしりて。後に子弟漸々に孝悌忠信を志すべし。世上の兄弟多分孝悌忠信を志さバ。多分の

○服膺ハ中庸拳々服膺とありて專ら勤むるなり

中にハ俊秀賢良の上才出現して。俊秀賢良の人世の中に多くなるべし。況や其次なる者をや。斯の如くなりなバ。無頼放逸の風俗一變して。忠孝文武の業當世に盛なるべし。小子此事を希ふゆゑ。敢て忌憚を憚らずして父兄訓を作る。父兄たる人小子が直言を咎むる事なくして。此書を服膺して子弟を教へ。子弟をして孝悌忠信ならしめバ。萬々世永々孝悌忠信の世となりて。父兄ハ子弟を怒らじ。子弟ハ父兄を恨ミずして。めでたく此上もなきたのしさなるべし。父兄たる人。なゝ〳〵を

○この文章宇治拾遺にあるものといふく趣意違へれど世人の戒めともなりぬべく思へば抽出せり

思ひ。こゝろをたのしめる。

鬼に瘤をとらる　諺艸巻二

貝原　好古

宇治拾遺物語にいへるは、昔ある人山路に行きくれて、側なる朽木に一夜をあかせり。夜半ばかりのころに鬼の様なる人大勢集り来れり。彼人是をみて甚恐ろしき事に思ひけり。暫ありて鬼ども酒宴を初めて謡ひ舞ふ。彼人始はおそろしく思ひて、恐ろしき事を打忘れ、酒宴の座に交りて鬼と共に舞ひうたふ。夜もやうやく明方になりければ、鬼

○違ゆるといふは誤りなり違ふるといふべし

○云々は然々といふ意にて種々の事を約めていふ詞なり

○仕合爲合の意にて時運のよきをいふ

○約束は互に詞をかはり合する

どもかの人に向ひて曰、汝重ねて爰に来りて遊ぶべし。約束を違ゆる事なかれとて、彼人の額にありける瘤を質にとりてさりぬ。かの人悦び家に帰り云々の事をはなしければ、人々聞て年久しく有し瘤をとられし事、仕合なりとて悦びあへり。『彼人の隣に瘤ある人、此事を聞てうらやましく思ひ、件の朽木の中を尋ねゆき、一夜を明しければ、案の如く夜半ばかり又鬼ども来り、始の如く酒宴し謡ひ舞ひける。隣人其中に打交りて遊びければ、鬼どもを見て悦びて曰、汝約束を違へ

ゲ如き意味あり史記曹参傳にあり

○丹鉛総録云癡人前不レ可レ説レ夢達人前不レ可レ言レ命

○芝居ハ則芝生（シバフ）に筵などを舗き

ぎして來れり。定めて貨物を取らへさん爲なるべし。今汝にうへすぞとて懐より瓔を取出し。隣の人の額になげつけれバ。瓔の上にこぶを重ねてなく〳〵家にかへりけるとぞ』是まことに世の人の富貴利達を羨み。其身に生きつかぬ幸を求むる者の戒とするべし。誠に此事ありとおもへらる。癡人の面前に夢を説くなり。

芝居の詞　松屋文集巻下

藤井　高尚

芝居といふものハ。昔ハ野べの芝生などにかたゐ（乞児）ども此しばゐ（芝居）して。さるがう（申楽）事をぞしつかうまつりけん。今ハ廣き假屋に平張うち。後にハ色畫かきたるさうじ（障子）などを立並べてわん物すなり。さて其態ハ能といふ舞の中なる。狂言といふものを今一きはくざきくつがへる（駟灑）様にしなして。昔正（マサ）しくありつる事をもあらぬ様に作りかへて。今様の世の振になし。されバ。今めかしき方の物見にハ又比ひなきものなり。是ハ狂言とぞいふ。此山里にも我神の祭の春秋毎に。難波より其方の人どもを求て此わざなどぞすなれ。今年の秋も舞子といふを

歌舞する事なり

慶長中出雲の巫（ミコ）國といふ者西京四條河原に芝居して歌舞妓をしより起れり然るに寛永中女妓を禁して男倡に為られしとぞ

○さるがうハ猿樂の字音にて中古より可咲（ヲカシ）態をするをかくいへり奇態をなして人を悦ばしむる故に峡猿之奇態

をまなぶといふ
辨散學の丈なゞ
あり
○能ハ則申樂の
一名なり其中に
滑稽なりを主
とする者を狂言
といふ
○我神云々ハ高
尚の仕へ奉る言
備武彦を祭れる
神社にして則吉
備津宮なり
○難波の事ハて
云とよりハ狂言
の爲組をいふ

の來て例の如くする。其頃我松屋に難波男來り居けり。字を三藏とぞいふ。芝居を深く好みて。暇のひまある度々行てみて。歸りては何の某なる上手に侍る。くまがしをわろりしずなど。舞子の名さへ善く覺えゐて。物語しつゝ行て見給へとそゝのかすまゝに。世に藏まりてつれて行きて。棧敷より見るに。實に面白し。二ッ蝶々何とかやいふ名の狂言になんありける』難波の事にて米賣る家に長吉といふ男。姉と二人すみけり。此男の有る中に。只今力の盛なるを頼みて相撲（スマヒ）を取り

○千載集おぼつ
かなうるまの嶋
の人なれやわが
言のはをしらず
顔なる』公任卿集
にもしらぎのうる
まの嶋とあれバ
三韓地方なるべ

ありし常ハ新町といふ。うかれめ（遊女）多かる所にゆきて遊びつゝ。友達の人といさかひて打合などもするをして。其敵を捕へて打倒しなど。都て荒々しき事をぞ好みける。親（オヤ）なく成りて後ハ姉なん子の如くにかなしくして生（オフ）し立けるが。かく出ありき（歩）て家の業を勤めねば。折々いさむれど。うるまの嶋人にあれいふ如くにて。更にうひなかりけり。或日家にかへるにあらそひて。友達の來ぬるにいひつらく。今宵ハ濡髪にあひて命を懸けて争ふ事ありといふ。ぬれ髪とは相撲の秀

し琉球なりといふハ更に證なきおしあてごとなり
〇秀手ハ最手とかきて今いふ大關なり

手なる男子の名なりとぞ。姉此事を聞ていとゞ悲しく思ふあまりに。怪しきたばかり（誅）事を思ひ得て。長吉を宿守にして近き渡りへ佛の御名を唱へにとて。ずゞ引下げて出てゆきけり。暮果て彼濡髪來りぬ。太刀を抜きて打合ふ程に。戸口より盗人よといひ罵りて。數多の人入り來りしが。かまへし太刀をさやにいれて。初の爭ひをしばし止めぬ。姉のかへり來りて人々とそら（空）爭ひをす。さるも此姉なる人の賢く思ひなりて。角力人との爭ひを止めし。且ハ懲りぬやと試

〇とぞうりハ時ぞうりの意にて暫の間なり
〇めくハ大凡を察する詞にて櫃の如きものといふが如し

らんとて。人々を語らひてかくはするなりけり。この作り事なりしとハ露しらで。物盗まぬよしいひ開かんとすれども。専さら事をぬといふ驗のなきをいかゞせんと思ひわぶ折ふし。さとの人どもあり詠め休らひて。立て長吉が著物や調度や。入きたる櫃めくものを持出て。此中を見給へりの盗まぬしるしなりといふ。人々立よりてさがしけるに。失つる物どもを入れてぞおきける。知らぬ事なれどしをあらがふべき筋なくてうつ伏ふして泣き居たりしが。ゆめしひて太刀を抜きて腹

○つゝしり歌とは慥かに續けず切れ〳〵に歌ふをいふ

切らんとするを、彼賢し人走りよりて太刀持たるこのひぢ（腕）をつと捕へて、誠ハこりさせんとてせし事ぞと言ひ顕して、いみじく諫めて、ながくと言ひ續けける事ども、げにさぞ思ふらん。と理り（ことわり）に悲しう押量らるまで、よそに聞さへ胸ふたがる心地す。さて、なれ父君の面伏（オモテブセ）をなる事といふ序（ツイ）次（デ）に、先に友達の來りてつゝしり歌ひし石童丸の事をいひ出て、幼き子どもを親をバうく思ひしものぞと諫むる人をきく人に咽をうへまぬ。石童丸の事さへ、此子まづいとけなきに父の出

○歸り來りていふ樣とハ難波人の歸りて芝居故に見し昔日の事を思ひ出して悲しき由を語るなり

○腹からハ同母兄弟なり自腹の義なりといへり

○親ハ早うなくなりて云々ハ難波人の身の上をいふなり

家（け）して高野やまにあるを慕ひて、遥けき道を尋ねゆきし哀なる芝居の古事にぞ有ける。此をみる人皆忍びやかに鼻をかみ渡せバ、彼難波男を泪を落しにおとして打ながめ居けり。事果て歸りていふやう、芝ゐを見侍れバ、昔忍ばれて、例ハ殊に思ひいでぬ腹からなるどもを戀しとぞいふ。親ハ早うなくなりて、家ハ兄の嗣きなれバ、叔父なる人の家に養き居たりしに、若き程の心治らぬそぞろにてや其家をも出たりけん、今ハかくなりのなくさ世にさすらふなれバ、彼諫を我身の上の事と

○三史ハ史記漢書後漢書なりとハ源氏物語雨夜の品定なる文をとれり

ぞ聞きつらんかし『三史五經の道々しき教へをきゝさとらんはかたかり深く心よしらてやはと思ふべき『抑芝居の狂言といふものは中昔の物語書の心ばえに似たる所ありすべて人の善き事惡き事をいふに并々此際は耳たゝぬかし芝ゐなる善き人といへども世に有難きまで心美くしく物のあはれをしりて萬勝れたるさまに作り惡しき人といへども限りなく腹黒くさかしらに善き人に織まつはるゝなき名負すを又男子女のこゝろに契りし事を違へば中畧物の哀をしるべき様に作りなしてあはれをあらじ昔物語なるとはに類乃事なぞといひつらば。されば物語文を讀まぬ程の人は此芝居を見よかしし物は哀をしらずして君に仕ふる事も又親のたゞ友達の交りめて奴どもを憐れむ事もすべて思ひやり深く細やかなる事なくて上邊を作り飾る様になるべき『これを若き男子女などみきては中畧にくしといふ人もあれど人かゝるはそあき『返すがへす物語書讀まぬ人には此芝ゐといふものを見せて物の哀をしらしを

まほしうちん（アル）

和文軌範巻之三　終